

国際ロータリー第 2780 地区

横須賀北ロータリークラブ週報

2016～2017 年度



例会日 毎週火曜日 12:30～13:30
例会場 かながわ信用金庫追浜支店 3階 横須賀市追浜本町 1-28
 TEL 046 (866) 1515
事務所 鈴木ハイツ 2F 横須賀市追浜町 3-22-202
 TEL・FAX 046 (866) 1801
 URL : <http://www.yokosukakita-rc.jp/>
 E-mail: info@yokosukakita-rc.jp



会 長 芹澤 達之 副 会 長 小菅 健史
 幹 事 前川 永久 会 報 委 員 長 品川 昌義

第 2 6 8 4 回 2 0 1 7 年 5 月 2 3 日『火曜日』横須賀北 R C

点 鐘
合 唱 「それこそロータリー」
司 会 芹澤 達之 会長
ゲスト
ビジター
誕生日祝
入会記念日のお祝い



「出席報告」

(本日)5月23日

総数	出席対象数	出席数	出席率	メイクアップ	計	修正出席率
24名	24名	10名	41.67%	9名	19名	79.17%

(前々回)5月9日

総数	出席対象数	出席数	出席率	メイクアップ	計	修正出席率
24名	24名	13名	54.17%	4名	17名	70.83%

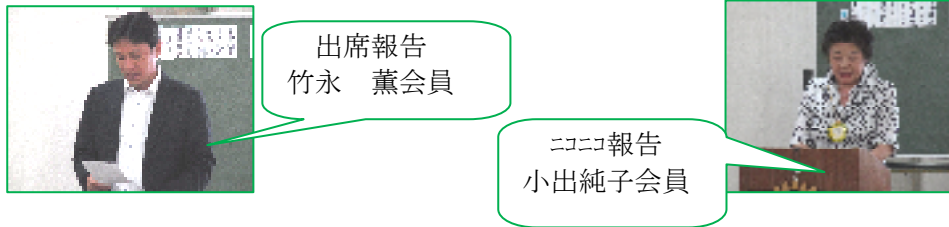
「メーカーシップされた会員」

- 5/15 ローターの友合同会議 伊与田あさ子会員
- 5/18 川崎マリノロータークラブ 石井伸二会員
- 5/20 地区新会員の集い 伊与田あさ子会員 平林祐樹会員
- 5/22 次年度第1グループ 三役会 石井伸二会員 千葉 茂会員 山田秀雄会員

「ニコニコBOX」

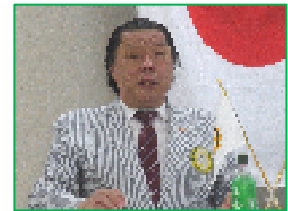
三役 平林会員、卓話宜しくお願い致します

福嶋義信・品川昌義・竹永 薫・小出純子・高田源太 各会員
平林会員卓話楽しみにしております。宜しくお願い致します
ニコニコBOXの合計は9,000円(累計521,000円)
ご協力有難うございました。次週も宜しくお願い致します



「会長あいさつ」

- ・先週の5月16日(火)第1グループ三役会がございましたが、親睦が趣旨で行われました。
- ・先日5月22日(月)は次年度の第1回三役会がございましたが、詳細につきましては、後日、次年度役員よりご報告して頂きたいと思っております



「幹事報告」

- ◎がばナ事務所よりクラブ事務局研修日程変更のお知らせ
日 時 6月 3日(土)⇒6月10日(土)に日にち変更
- ◎横須賀西ロータークラブより例会のお知らせ受領
- ◎回覧
 - ①「週報」 横須賀ロータークラブ・横須賀西ロータークラブ・横須賀南西ロータークラブ
 - ② 横須賀西ロータークラブより「チャリティコンサートお礼状と収支報告」

「委員会報告」

「スピーチ」

「障害福祉について」

平林 祐樹 会員

私には今、二人の娘がおりますが、本当はその子たちの上にお兄ちゃんがおりました。その子は生まれながらにして障害を持っておりまして、3歳の誕生日を前に亡くなるわけですが、その子と過ごした3年間というのが私にとって非常に意味深い時間でありました。これからお話しする内容は、男性側からの身勝手な意見であったり、障害福祉に携わる方にとっては心苦しいこともあるかと思っております。経験から感じた率直な感想ということをご理解いただき、短い時間ですが順を追って簡単にお話しさせていただきます。



まず、私たち夫婦が27歳のとき妻の妊娠がわかり、何度か検診を重ねていくたびに、お腹の中の子の成長が標準より遅いということを医者から告げられました。私たちにとって初めての子ですので、この時点から不安を感じておりました。そして何度目かの検診の時に、障害を持った子の可能性が少なからずあるので、「羊水穿刺」という検査を勧められました。この羊水穿刺というのは、母親のお腹に針を刺し羊

水を少量抜き取り、その羊水に浮遊している胎児から剥がれおちた細胞から、胎児の染色体構造を調べる検査です。ちなみにこの検査は妊娠後 15 週から 18 週の間に行ない、費用は約 15 万円全額自己負担となります。この検査によって私たちの子どもは、4 番染色体の短腕部の欠損による「ウォルフ・ヒルシュホーン症候群」という、染色体異常による先天性障害児であるということが判明いたしました。私たちは、この病気について様々な資料を読み漁り調べました。5 万人に 1 人の確率で発症しており、日本での患者数は 1000 人以下。その多くは出産前に死亡することが多く、出産までこぎつけてもそのほとんどが 2000 g 以下の低出生体重児であること。ちなみに最も有名な染色体異常である「ダウン症候群」は、妊娠年齢にもよりますが、約 1000 人に 1 人の確立とされています。一般的に妊娠年齢が高いほど、先天性の染色体異常が起こりやすいとされており、調査によると流産の原因の約 6 割が染色体異常であるそうです。こんな話をして何が言いたいかと言いますと、子どもを産むということは当たり前のことではないということはもちろんのこと、私たちが健康に産まれてきて生きていること自体が、奇跡に近いことであるということを理解しなければなりません。そして、先天性の障害というのは確立として誰にも起こり得ることであることなのです。

さて、私たちの子どもに障害があることがわかり、通う病院も横浜市にある「神奈川県立こども医療センター」という所になりました。この病院は、全国から様々な難病を抱えた子どもたちが集まる病院であり、紹介がなくては通院できません。この病院に通う中で私たちは担当医師より、墮胎手術を勧められました。先に申し上げたように、まず生まれてくること自体が稀であること、生まれてきたとしても 5 分以上の生存の可能性が少ないこと、また生まれてきた子が正常な人間としてのケアをしていない可能性があること、これらのうちどれが起ころうとそのショックに私たちが耐えられないであろうこと、などが告げられました。私たちは本当に何日も悩みました。でもやはり結論は変わらず、「産みたい」という気持ちを医師に伝えます。医師を説得する条件として、父親である私自身も出産に立ち会うことで、たとえ 5 分の命であろうと我が子の顔を見ることができるとことや、このケアをしていなかろうが、そのショックを夫婦 2 人で共有し分散できると考えました。これらを伝えると、医師は私たち 2 人の手を取り、「これから一緒に頑張ろう」と言ってくれました。後になって思えばですが、毎日のように子どもたちが亡くなっている新生児を扱う高度な医療現場で戦う医師が、わたしたちに「君たちの子がどんな子でも育てる覚悟はあるのか？」と試されていたように感じます。

こうして、様々な妊娠中の苦難を乗り越え、何とか出産日を迎えます。予定通り、夫婦 2 人で産室に入り、息子を取り上げました。出産後すぐに保育器に入れられ、我が子を抱く暇もなく、気管内にチューブが入れられたほか、全身に様々な機械が取り付けられました。まず第一に感じたことは、率直に申し上げてこのかたちをしていてよかったという感想でした。体重は 1768 g、泣くこともない本当に小さい命です。

その後、我が子はそのまま病院の保育器の中で育ち、24 時間完全看護のなかで過ごします。最大の危機はすぐにやってまいりました。産まれて 2 ヶ月目を過ぎたあたりのとき、夜中の 3 時ごろに病院からの緊急連絡があり、すぐにわたしたちは病院に急行いたします。到着した時には、呼吸が荒く心拍数が低下しており、医師からは、もう改善に向かわせる有効な手段はないので、このまま私たちの腕の中で

天寿を全うさせてはどうかと言われました。ただし、ただの抱っこではなく、夫婦2人とも上半身を裸にして抱っこする「カガルーケア」という方法をとろうと提案されます。その勧めに従い、子どもにつながっている機械類を外し親子3人裸になり、代わる代わる抱っこしたり、時には3人で肌を寄せ合うように抱っこをしたりしました。1時間程度それを続けていると、我が子の顔には血色がもどってきました。急いで心拍センサーを取り付けると、明らかに状態は改善されており、この時点ですぐにまた必要な機械類を取り付け再び保育器での完全看護が始まります。このカガルーケアという療法は、今では救命行為が第1の目的ではなく、現代社会による問題の1つにある母子間の愛着形成不足を補うために行なわれる健康児に対するケアであり、どちらかといえば母親に対するケアなのですが、もともとは保育器が不足している時代に、直接的に肌で体温を温めながら出生児と愛情交換をする、低出生体重児への緊急療法として用いられていたそうです。この当初の話を知っていた医師は、現代医療の最前線にいながらも現代医学では説明のつかない不思議な力をも考慮しながら、多くの命を救っていることに、大変感動し感謝しております。

産まれて4カ月が過ぎ、退院が許可され、酸素ボンベでの酸素吸入や胃にチューブを入れたままの流動食であったりではありますが、自宅に戻ることができました。自宅でも24時間完全看護は変わらず、4時間ごとにチューブに食事をセツしたり、ひとりで排便ができないために、6時間ごとに浣腸による排便補助など、夫婦2人で24時間を分け合いながら、3人ともが一生懸命に生きていたと感じます。その後、携帯型酸素ボンベを装着することで、外にも出かけられるようにもなりました。

その後我が子は、先天性障害者に多く見られる心臓の奇形の手術を行ったり、てんかんによる発作が毎日何度もおこったり、またそれを抑える薬の量と副作用とのバランスの難しさなど、入退院を何度も繰り返しながら色々な苦難がありました。3歳を迎える1週間前に天寿を全うすることとなります。

この3年間は、私にとってかけがえのない3年間であり、掛け出しの夫婦にとって、一つの目標に向かってギリギリのところまで協力し合いながら毎日を過ごすことによって、より愛情の深いパートナーになれたと感じております。この長男の下に2人の健康な娘を授かることとなりますが、「兄はこんなに頑張ったんだから・・・」という厳しさを持ち出してしまうことも多々ありますが、年々すくすくと育つ姿が本当に感動的に感じます。

とある障害者の会に入会した時のことです。会に入って親睦を深めるうちに、親たちが「この障害に産まれてきて本当に良かった。この子が亡くなったとしても、また子を授かるなら同じ障害を抱えた子が欲しい」であったり、「障害はこの子に神様が与えてくれたプレゼント」などと言う方が多く、また1人が言うと「そうだそうだ」と同調する雰囲気になります。私は、ここに違和感を感じました。自分の子を否定したくないので、そういう風に思いこんで自分の気持ちを落ち着かせているということは理解できますが、どこの親が望んで障害の子が欲しいなど思うのでしょうか。また私は、もし神がいるならこんなプレゼントを与えた神を恨みたいとも思ってしまいます。障害を試練だと言うなら、もはやそれは宗教の話であって、ましてや、その試練は私たちに与えられた試練であり、試練を受け入れ乗り越えていく私たち個人の成長につながるだけの話で、何の罪もない産まれてくる子どもを犠牲にして自分たちの成長を願うのでしょうか。人間は誰でも、友達と遊び語り合い、恋をして傷ついたり、物事を成し遂げた時の感動を味わったり、素晴らしい人生経験を積む権

利があるのです。我が子にもそんな経験をさせたいと願うのは、ごくごく当たり前のことと考えます。

また、病院では様々な病気を抱えた子に出会います。先天性の奇形により、本当に当たり前の器官を持っていない子なども多くいるのです。そんな子を見ると、「ああ、自分の子はちゃんとしていて良かった」や「あの子に比べてうちはまだマシだ」などと感じるのです。これが人間の本当にあさましいところであり、自分自身もそうでありました。さらに、病院に入院中には、様々な福祉団体がサポートをしてくれるわけですが、例えば節分の豆まきで鬼に豆をまいたり、クリスマス会などでハチ落としをやる時などにも、「うちの子は寝たきりだから参加できないのにその企画はおかしい」などと、純粋に子どもたちを楽しませてあげようとした学生ボランティアなどにさえ、親たちは様々な文句をつけてしまうのです。

人間というものは、自分勝手であさましい生き物であり、普段は理性によって体裁を保ってはおりますが、ギリギリに追い込まれた時には本能的に自分を防御するために他人を攻撃する点があるのです。あの病院で自分自身も含め多くの親たちがそうであったように、我が子のためかどうかよりも自分が傷つきたくない方に心の針が傾いていたのが事実です。

最後となりますが、国や市町村などの公共団体による公共福祉は、障害者で言えば等級でわけるときめ細やかな分類があるものの、やはりそこは画一的なサービスであるべきです。しかしながら、お話ししたようにそのサポートを受ける側の気持ち次第で、いかようにもシステムの評価は変化します。ですから、公共で定められている以上の受け手側の事情に合わせたきめ細やかなサポートは民間団体が担うべき役割であり、公共団体に全てを求めるのは間違いであると考えます。そして、民間団体のサポートは公共の画一的なサービスではカバーできない特定の人の為に特化したようなサポートであるべきであり、そのような団体や、そこに所属する人を増やしていけるような、福祉の考えをなるべく多くの私たち市民が持っていくことが大事です。私は、ロータリークラブという世界一の奉仕団体と言われる会に所属した以上、このような考えをなるべく多くの方々に持っていただくために、この団体で奉仕という概念をこれから良く学びながら、より良い社会をつくる一員となれるよう研鑽を重ねて参りたいと思います。本日は、ご清聴いただき誠にありがとうございました。

～例会風景～

